

学級・ホームルームをつくる



偶然の出会いを楽しんで

様々な偶然が幾重にも重なって成り立っている学級の子どもたちと担任であるあなたとの出会いは、まさに奇跡です。そして、そんな出会いを偶然から必然に変えるのが学校であり学級の存在意義ではないでしょうか。だとしたらこの奇跡を楽しんでみませんか。

もう二十年も前のことですが、学級経営とは何かと考え、悩み、偶然に手にした雑誌に『学級づくりは納豆づくり。同じ大豆からできていても粒がすりつぶされて均一に白く四角く固められている豆腐ではなく、四角いパックの中に入っているのもそれぞれの粒の形状のまま互いに糸を引き合う納豆のような学級を』という言葉を見つけ、妙に納得したことを覚えています。白くて四角いパックが教室ならばそこに集う子どもたちはひと粒の納豆。関われば関わるほど互いに糸を引き合い、その関係は強くなっていく。そんな子ども同士の関わりが生まれた時、それが偶然出会った学級という集団が必然へと変わるということなのではないでしょうか。

あなたは今、毎日学校に行くのが楽しみです。そして、毎日を笑顔で過ごしています。家に帰ってほっと一息ついた時、自分が担任している子どもたち一人一人の顔を思い浮かべてみてください。担任している子どもたち一人一人の顔は輝いていますか。もし、うまく思い浮かべられなかったり暗い表情が浮かんできた子がいたりしたら、次の日、真っ先にその子に声をかけましょう。

あなたは授業をするのが楽しいですか。教える側が楽しいと思えない授業を子どもたちが楽しいと思うはずはありません。何より教師が楽しんで授業をすること、楽しんでい

姿を子どもたちに見せることが子どもたちの学習意欲につながるはずです。私たち教師は授業で勝負すべきです。教師が全力で取り組むと子どもたちはそれと同じくらいの気持ちで向き合ってくれるはずです。教師が頑張った分、子どもたちも成長するのです。

あなたの学級にはうまく自分の思いが伝えられずについていけない子はいませんか。そんな時には「あなたはもうどうしたかったの。」と問いかけてあげましょう。子どもは何かを言ったりすることはきつと理由があるはず。集中して話が聞けず、授業を中断せざるを得ない時には、その子にはまだ話を聞く準備が十分に整っていないのだと考え、少しだけその子に寄り添ってみる心のゆとりを持ちましょう。

教師という仕事にマニュアルはありません。同じ言葉をかけても子どもたちの反応も受け取り方も様々です。その時のその子の心の在り様によっても変わります。先輩の先生方の実践を真似ても先輩と同じようにはいきません。それは先輩の子どもたちに対する思いや願い、これまでの実践で培った様々な知恵がそこに凝縮されているからです。でも先輩の思いや実践を知ることでああなたが知らず知らずのうちに身に付けていく事も多いはずです。あなたにはたくさんさんの可能性があります。ですから、周りの人の声に耳を傾ける心の余裕と謙虚さを持ち、失敗を恐れずに自分にできそうなことから挑戦してみてください。一緒に成長しようと努力する姿に子どもたちは信頼を寄せるでしょう。根競べのつもりで粘り強く子どもたちに向き合ってください。子どもたちと一喜一憂する毎日は、これからのあなたがやがて大切な宝物となるはずです。手をかけ、体を張って子どもたちと向き合う今がやがて必ず実を結ぶことを信じ、この奇跡的な出会いをぜひ楽しんでみてください。

子の安心した学びを支える学級づくり

教室は、子どもの学習の場、生活の場であり、安心して過ごせる、温かく落ち着きがある環境でありたいものです。私たちは、「個に応じた」という言葉をよく使いますが、一人一人をよく見、少しでもその子に応じた指導をすることで「生きる力」を身につけさせるのが学校です。

ある若い先生と勤務したときのこと、その学級の子どもたちがとても素直で優しく、学ぶ意欲に満ちていたことに驚かされたことがあります。出授業で前に立つと、はつとせられるほど真剣な目がこちらを見つめます。学級には発達に課題がある子など配慮の必要な子が何人もいましたが、温かな雰囲気に含まれて皆が落ち着いていました。授業中に学習準備のことやら、友達との小競り合いやらと児童指導に時間がかかることがあります、その学級ではほとんど無縁でした。子どもたちは四十五分間をきちんと学びに費やすことができました。時には学級内での小さな諍いはありましたが、うまく解決できる人間関係が育っていました。

何が違うのかと考えましたが、一言でいうと、「担任が教師として当たり前にすべきことを根気強く指導している」ことでした。担任は、子どもの声によく耳を傾け、毎時間の授業の準備をよくして臨んでいました。授業前にはいつも早めに教室にいましたし、促さずとも日直の元気な挨拶の声で授業が始まり、全員がスムーズに学習に向かえました。わかりやすい板書がなされ、発問や指示も明確でした。配慮を要する子も温かく支えられ、つまずきの予想されるところでは、タイミング良くその子に応じた支援がなされていました。

た。当たり前のルールが守られ、職員室で共通理解された事項は丁寧に指導されていました。担任の真摯な姿勢は子どもたちに十分伝わり、子ども同士の励まし合いや磨き合いも見られました。子どもたちは自分の思いを素直に表現し、友達の良さをしっかりと見いだして協力することができました。思いやりのあるリーダーも着実に育っていました。学級は子どもたちにとって、とても居心地がよく、安心して過ごせる空間となっていました。「自分は準備をしないと不安で臨めないの。」と、担任はいつも控えめな返事でしたが、当たり前のこと、やるべきことをきちんと指導すれば、子は確実に成長していくというのがまさに証明されている学級でした。

算数の少人数指導を担当したとき、私は日頃目立たない子、自信のなさそうな子どもたちが自分なりに考え、進んで発表しようとする姿、友達に負けまいとがんばる生き生きした姿に接し、誰もがわかるようになりたいという思いを持っていることを痛感しました。学習のめあてを明確にし、準備をよくしてわかる授業を展開する、はじめから「できない子」というような見方をしない、つまずきをそのままにしないなど、教師の姿勢如何で子どものやる気、取り組みの様子はぐんと変わることを実感しました。

学校は日々忙しい職場ではありますが、私たちには子どもたちの成長を間近に見られるという楽しみがあります。子どもたち一人一人が大切にされている自分を感じながら、居心地よく安心して自己実現できる学級経営を目指していくことが我々の責務です。それには何より教師自身が、常に学ぶ姿勢を持ち合わせ、真摯に学級に向き合い、指導すべきことを確実に行うことを常に基本としたいものです。

鹿沼市立久我小学校 武田 淳子

子供を理解することと規律を指導すること

大学の頃から心理学に興味があった私は、教育相談の研修があることを知り、教育研修センターで初級の研修を受講しました。続けて連合教育会の相談部で実施している中級や上級の研修を受講しました。そして、宇都宮大学の教育学部で生徒指導の内地留学をする機会に恵まれ、堀内聰先生に出会いました。堀内先生の研究室で学びながら、「不登校」の子供たちと夜中の日光街道を歩いたり、スキーに行ったりしました。その中で「不登校」という壁にぶつかっている子供たちへの対応を学ばせていただきました。その当時、先生はちゃんぽらんの雰囲気を漂わせ、「まじめはみじめ。」等の毒舌を周囲にふりまいていました。しかし、実は大変にまじめな方で、時間があれば、難しいタイプの「不登校」の親のカウンセリングに取り組まれていました。

内地留学が終わり現場に戻った私は、内地留学で学んだことを子供たちへの対応に生かそうとしました。個々の子供理解を基本に学級経営にあたらうとしたわけです。しかし、なかなか私の考えている方向に子供たちが動きません。むしろ、問題行動がみられるようにもなっていました。なぜ、このような事件が起こるのか、そして、毎日のように指導しなければならぬのか、当初はなかなか理解できませんでした。年度末になり振り返ってみると、「わかる、わかる。」あるいは、「きつと気づいてくれるだろう。」だけでは、私の意図が子供たちには伝わらなかったのではないかと思うようになりました。

さらに、内地留学していたことがきっかけとなって丸山隆先生が中心になって活動されている研究会に参加させていただくことになりました。研究会は、教育相談に関心がある

教職員が夜集まり、丸山先生の指導の下、ロールプレイングを通して子供の心を理解することをしていました。特に、「不登校」「いじめ」「家庭内暴力」などを取り上げて、何度も事例研究を重ねました。役割に応じた動きをしていくことで、そこで何がおきているのかが明らかにあります。演じることでそれを見ることで事例の見方をより深めることができました。

そんなある日、指導をせずに子供を認めるだけの学級経営についてのロールプレイングを試みました。子供A「先生、トイレ。」教師「トイレにいきたくなくなっちゃったのね。」子供B「先生、水、飲みたい。」教師「のどがかわいちゃったのね。」・・・

これを繰り返していくと、子供は授業が始まっても着席しなくなり、教師の話も聞かなくなっていました。いわゆる学級崩壊の様相を呈するようになっていたのです。このロールプレイングをしながら、子供を認める、理解していくことだけでは学級として成立しなくなってしまうことに改めて気づかされました。

日本の学校教育は、教師一人が四十人近い子供たちに一斉指導するシステムです。もちろん指導をしていくのにあたり子供一人一人についての理解が必要です。しかし、一斉指導をしていくには、集団で学んでいくための規律も必要です。授業中、勝手にしゃべりをすることを認めるわけにはいきませんし、離席することも認められません。このような規律が一斉指導を支えるシステムとなっています。そして、規律も子供にとってわかるように教えて守らせねばなりません。子供を理解することと子供に規律を教え守らせることはともに大切なことです。

県立高校教員として三十余年間、この職に就いたことを悔いたことは一度もありません。定期異動の一年目に戸惑うことがあっても、生徒と一緒にいれば吹き飛びました。人生においてもっとも多感で気まぐれで、一途で、揺れ動いていて傷つきやすい思春期まつ只中の生徒たちと共有できた時間は、私にとって珠玉そのものでした。まさに天職でした。

さて、ホームルーム経営、教科指導、教科外活動を通して、私の基本的なスタンスは駆け出しの頃から現在に至るまで、ほとんど変わることはありません。

その一、生徒の前に立つときはベストコンディションで。生身の人間ですから、気分が優れなかったり等調子は様々あっても、常に情緒が安定した状態で生徒と接しました。

その二、言語生活。我々の仕事の大半は生徒とのやり取り、即ち観察・分析と語りかけですが、後者の話すことにはスキルが必要です。教員同士で「〇〇を伝えましょう」と意思統一したとします。ところが、実際に話す先生によつて伝わり方に差が生じます。何故でしょうか？それは、話し方の違いによるものと考えられます。WhatよりもHowのほうがより重要と言えます。生徒に届くように言葉を選び、目線や間の取り方も大切です。

その三、面談をするとき。話は逸れますが、中年を迎え身体にガタがきて、定期検査を受けドクターの見立てを聞く機会が増えました。最近の医療は「化が急速に進み、これまでのデータが全て画面に映し出されます。ドクターは専らそれを見ながら紋切り型のアドバイスをします。この人は人としての私に関心があるとは思えない、いつも感じさせられました。教員も似たような面談を無意識にしていけないでしょうか。「〇〇の偏差値が下ったからしつかりやらない」といった具合です。生徒は立場上大人しく聞いていま

すが、その言葉は果たして生徒の心に響いているでしょうか？データよりも先に、目の前の生徒がいま何に力を入れ、あるいは入っていないのか、それはどういう事情からか、本人に語らせてあげれば、解決の糸口は当人の口から自ずと出てくるでしょう。

その四、生徒の力を引き出す。ある時期からパソコンが教員一人に一台ずつ貸与されるようになりました。当時の理由づけは確か「校務処理の効率化を図り、これまで以上に生徒に直接関わる時間を確保する」といった旨であったように記憶しています。ところが実態はどうでしょうか。多くの先生がたは机の前のパソコンに向き合って終日過ごす、といった光景が目立っていませんか。これはやり過ぎでは？と首を傾げたくなる事例をふたつ挙げます。一つ目、年度あたりの新クラスのスタートにあたり、担任が時間割表を綺麗に作成して掲示するのが今や当たり前になっている感じがします。誰か生徒にやらせれば、一生懸命やってくれる筈だし、そのうえ褒める材料ができるのに。もう一つは、アフターファイブの会合の案内を、幹事さんが地図までダウンロードしててビシッと作ってくれます。おいおい、勤務時間にそこまでやるかい？どっち向いて仕事してるんだか。

最後になりますが、私の信条です。人は皆祝福されてこの世に生まれて来しました。爾来死ぬまで他人から認められたい、人とはそういう存在です。ならば生徒をありのまま認める事が教育の出発点でなければなりません。また、教育活動に「コスト・パフォーマンス（費用対効果）」は必ずしも最良の物差しになりません。徒労に終わりそうなのが予想される場面においても、「サイキック・インカム（冥利）」が訪れるのを楽しみにコツコツやることです。自分で選んだ道なんですから。